

編集後記

スマートフォンとインターネットによって、写真が「民主化」したと指摘される。かつてプロの写真家となるためには、高価な撮影機器を取りそろえ、一瞬のシャッターチャンスを見逃さぬよう高度な撮影技術を習得し、発表の場を持つ必要があった。多くの人の目に触れる写真を撮るのは、それに値する技量や「立場」にある職業写真家だけに許される、特権的な役割とされていた。しかし、今日では誰もが、高性能のカメラ機能を備えたスマートフォンを保有し、常に持ち歩いている。誰でも、手軽に高品質の写真を撮影することができる。撮影した写真は即座にソーシャルメディアを通じて世界に発信できる。今や、写真の撮影・発表の機会は広く一般に開かれている。職業写真家の特権性は薄れ、誰もが労せず「カメラマン」となれる。この意味で、写真は民主化されてきた。

しかし、その一方で、新たな形で「特権化」も進行している。日々膨大な枚数の写真がアップロードされることで、ソーシャルメディアに写真が氾濫するようになった。写真の洪水に巻き込まれ、「見るに値する」写真に出会える確率が下がってしまう。ユーザーのこうした悩みを解消すべく、ソーシャルメディアのプラットフォームは、個人の閲覧履歴や位置情報などに基づき、一人ひとりが「見たい情報」を表示できるよう、アルゴリズムの精度を磨き上げている。多くの人々の興味・関心を引きつけることで、ソーシャルメディアのプラットフォームは特権的な地位についている。いまやその影響力は、われわれの日常生活だけでなく、国家政策さえも左右するまでに強化している。

学術研究の世界でも、民主化と新たな特権化が進行している。インターネットの普及によって、研究成果を広く公開できるようになった。その一方で、公表される研究成果の質は玉石混交となり、専門家による「ピア・レビュー」の価値が一層高まってきた。レビューの厳格さに基づいて、各研究分野で学術誌の序列化が急速に進行している。序列の高い学術誌に研究成果を公刊することで、多くの読者を獲得し、多くの被引用につながる。被引用数が多い研究者は、競争的な研究資金を獲得しやすくなり、画期的な研究成果につながる可能性が高まる。

こうしたなかで、学内紀要はどうあるべきか、『上智経済論集』の歴代編集委員は悩み続けてきた。以前、編集委員長を務めた際にも、「編集後記」で同様な問題意識を表明したが、今日に至ってもなお悩み続けている。

第70巻となる本号では、ささやかな試みとして、上智大学経済学部・経済学研究科での研究・教育に関連する内容を、カテゴリー・分量を問わずに掲載するという編集方針を取ることとした。従来から掲載してきた研究論文・研究ノートに加えて、研究に関わるエッセイや教育用資料など「新しいカテゴリー」の原稿を募集した。幸いにも川西教授より「読書ノート」の寄稿があり、今号では「研究論文」「研究ノート」「読書ノート」と、多様なコンテンツを取りそろえることができた。また、例年通り、修士論文要旨も掲載している。

これらのコンテンツが経済学部・経済学研究科での研究・教育活動の「ショーケース」の役割を果たし、活発な議論の契機となることを望むものである。

(2025年2月15日 編集委員長 網倉 久永)